



図書館報 みかづら

和歌山県立医科大学図書館三葛館



目 次

館長ごあいさつ -----	1	私が感銘を受けた女性による著作物のご紹介 -----	7
支えられ成長できた場所 -----	2	本と私 -----	8
My favorite books -----	3	図書館での過ごし方 -----	9
「その先へ」 -----	4	本嫌いの私が図書館を好きになった理由 -----	10
図書館のすばらしさ -----	5	4 年間の思い出 -----	11
図書館について -----	6	平成 29 年度三葛館活動記録 -----	12
本から学ぶ -----	6		

館長ごあいさつ

図書館報みかづら第 22 号の刊行に当たって

図書館長 (保健看護学部 教授) 森 岡 郁 晴

昨年 4 月図書館長に就任しました。この一年、紀三井寺館を含め、両図書館の発展に寄与するべく頑張ってきたつもりです。その成果は利用統計に表れます。図書館三葛館の成果は、この号のどこかに記載されていると思います。いかがでしょうか。

さて、図書館三葛館では、今年も学生、教職員ならびに学外者に向けて「図書館報みかづら」を発行します。「図書館報みかづら」は平成 10 年に創刊し、学生や教職員に対して研究成果以外に情報発信できる数少ないメディアの一つとして発行してきました。今回は第 22 号として、ご退職、ご着任された先生方に加えて、4 年間の図書館の貸し出し数が多かった学生に授与される「ベストリーダー賞」の 1 位を受賞された方からの寄稿も含めています。それぞれの方の図書館についての思い出や後輩たちへのメッセージなどをお読みください。

図書館の使命は、学術情報の基盤施設として大学の教育・研究を支えるところにありますが、果たすべき役割は変化しています。昨今図書館の公共的な知識等の保存や発信が重要視され、論文等の自由なアクセスによって研究の発信・公開が加速されています。また、一般の方の知的好奇心を満たしてゆくことも期待されるようになってきました。これまでの役割に、このような公共的な役割・機能が加わり、

図書館の役割が広がってきています。

図書館がこれらの多角的な役割を担ってゆくためには、図書館における活動を多くの学生、教員、そして学外者にも知っていただき、利用しやすい図書館になることが緊要であると思われます。そのためにこそ、このような「みかづら」が重要な意味をもっていると思っています。ぜひご一読いただき、図書館をさらに身近に感じていただき、積極的にご利用くだされば幸いです。また、欲しい書籍などがあれば図書購入リクエスト用紙にご記入ください。皆さんと共に発展させていきたいと考えています。

.....

支えられ成長できた場所

保健看護学部 助教 佐藤 誠 治

今回の文章を綴るに当たって、正直戸惑いを隠せません。なぜなら自分自身、これまでの人生の中で読書にそれほど時間を費やしたことがなかったからです。両親や兄弟は読書家でしたが、末っ子の私は、幼少期から運動ばかりで、学校から帰宅した後は暗くなるまで外で遊びまわっていました。最後まで読んだと断言できるのは、テニスと野球などの運動関係の専門書くらいです。今回依頼があり、過去の館報を熟読すると、これまた本が大好きな先生方ばかりで、嫌な汗が出ました。そんな私が、他の先生方のように本との出会いについて語るのには、到底不可能です。なので、これまでの私と図書館との関係(思い出)を振り返って書いていこうと思います。

まず図書館について皆さんが持っているイメージとはどんな感じでしょうか。図書や雑誌を借りる、複写をする、あるいは調べものをする、また勉強する、じっくり本を読むなど、色々な用途があると思います。私自身、本学在学中は実習や試験期間によく利用させていただきました。その時は大学内の施設を使っているという認識で、それほどありがたみを感じたことはありませんでした。しかし、卒業して附属病院で勤め始めた新人時代、この時ほど図書館に感謝したことはありません。医療従事者というのは日々自己研鑽が必要であり、患者さんにより良い看護を提供するためにも高度な知識と技術が求められます。それに応えるには日々学習していくしかありません。それは、職場環境に慣れない新人看護師の私にとってそれなりの苦痛を伴うものでした。そんな中、その環境から救ってくれたのが言うまでもなく、本学の図書館三葛館でした。三葛館には初学者向けの書籍からかなり高度な専門書まで豊富にあり、調べものに困ることはまずありませんでした。自宅では憂鬱な学習やレポートでも図書館に来たら捗りましたし、国家試験の勉強や実習記録を一生懸命書いている後輩をみると「自分も頑張らないと」と意欲が出て、辛い新人時代を乗り越えることができたと思っています。それから月日が経ちましたが、今でも何か調べものがある度に三葛館を利用させてもらっています。新人の時は支えてもらい、今では自分自身が成長できる場所でもあります。

最後に言っておきたいのは、いつも修士の研究や学習の助けをしてくださる図書館職員の方々のこと

です。蔵書や施設、設備は財政的な基盤さえあれば立派なものを作ることが比較的容易だと思いますが、人は違います。三葛館の職員はいつも真摯な態度で親身になって利用者と図書館を結ぶという重要な役割を担ってくれています。この場をお借りして感謝申し上げます。これからも三葛館は本学の学生だけではなく、和歌山県の医療従事者が患者・家族、そして自分のために、共に学習し、発展できる場所として多いに活躍することでしょう。

My favorite books

保健看護学部 教授 志波 充

何かしらよくわからないうちに時は過ぎ、もう仕事には来なくていいことになるらしい。
「これから本気出すんだからもうちょっと待ってくれよ、いまちょっといいところなんだから」
「それはもう何度も聞いた、仏の顔も三度までだよ」

退職を迎えるにあたっての心残りは、三葛の図書館の本をほとんど読んでいないこと。読みたい本があるのに特に精神関係の本は充実しているので残念です。

これまでで面白く読んだ本はと考えると、吉川英二「宮本武蔵」、松本清張「砂の器」。藤沢周平「玄鳥」や一連の作品は、初期のころ作家自身の私生活が幸せとは言えなかったので作品も暗くて救いようがなく読み続けられないけど、途中本人が再婚してからは作品も明るくなって、この人は本当に文章も筋立ても上手だな〜と詠嘆。司馬遼太郎「新撰組血風録」。レイモンド・チャンドラー「長いお別れ（ロンググッドバイ）」は、直木賞の藤原伊織「テロリストのパラソル」や（これはテレビでしか見えないけど）東野圭吾「容疑者Xの献身」の、パクリとまでは言いませんがトリックの元になっていると思う（ちがうかもわかりません）。

少し真面目なところで、やっぱり若いときに読んだ夏目漱石の3部作、「三四郎・それから・門」、それと「こころ」。でも漱石の言っている意味の半分くらいしか理解できてない気がします。漱石と川端康成「雪国」は20年位おいて2度ずつ読んだけど、当時は大人のほんとの世界がわかってなかったので、今読めば作品の本当の価値がわかると思うけど、通り過ぎちゃった感があって多分残念ながら読み返すことはない。大江健三郎「個人的な体験」、三島由紀夫、阿部公房、水上勉など。もう古くなった作家ばかりで、今の学生さんにはあまりなじみがないですね。

長い間色々とお世話になりました。

「その先」へ

医学部 教養・医学教育大講座（医療社会科学） 准教授 本郷 正 武

研究上の都合で、他大学の附属図書館を利用することが多い。特に今年度は、書庫に入る必要があったので、図書館長印の入った紹介状や身分証明書の提示がその都度必要で、図書館長には迷惑をかけた。しかし、図書館側からしてみれば、学外の闖入者は排除しなければならないだろうし、まして故人の調査データといった、個人情報満載の資料を閲覧するわけだから、相応の警戒は致し方ない。もし、資料を掠め取ったなら、とんだ外交問題になってしまう。図書の紛失や転売など、図書館をめぐるトラブルもよく聞こえてくる昨今の事情もあるのだと思う。

図書館に所蔵してあるものは、図書に限らず、電子ジャーナルなど PDF や音声・映像データなどにまで広がっている。以前、大英図書館で血液製剤による HIV 感染者（日本ではいわゆる「薬害 HIV」感染被害者）のオーラルヒストリーの音声データをトランスクリプトとともに視聴した。この高度な個人情報をも分に含んだ各種データは、図書館の端末を通してしか視聴・閲覧できない。このような調査データの二次利用に際しては、図書館のデータ管理の堅牢さが活きると思われる。図書館に通う意味もここにある。

本学図書館でも電子化は進んでいる。私が開講してきた教養セミナーでは、受講生に文献検索の実習を課しており、電子ジャーナルでも読める文献があることを知ることで、後々役に立つ日が来るものと（希望を込めて）期待している。国会図書館では、保存性を高める理由から古い文献ほど、どんどん PDF 化が進んでいて、端末から世界が広がる。とはいえ、最初から「当たりをつけて」資料検索する場合には、電子化は大歓迎だが、検索ワードが良くなかったための検索漏れや、隣の棚との「偶然の出会い」に与えることは極端に少なくなるだろう。巻末の参考文献から「芋づる式」に文献をたどるのも、思いがけない出会いがあって楽しいものだし、個性やセンスが試されているようで、むしろチャレンジングである。

だから、電子データの利便性に抗するよりも、「その先」に行くよう心がけていきたい。リサーチ・リテラシーを高めるのも、こうした心がけによるところが大きいであろう。私たちはこうしたデータの管理や電子化に携わっている多くの図書館職員に感謝し、今日も図書館と「その先」に向かう。



図書館のすばらしさ

医学部 教養・医学教育大講座（法学） 教授 神谷 隆 一

図書館は、私の大好きな場所の一つです。一度図書館に入ると、油断すれば半日くらいあっという間に過ぎてしまいます。時々、図書館で何日か過ごしたいなあと思うこともあります。特に、大学図書館の、専門書がずらりと並んだその厳かで静かな空間は何とも魅力的で、そこで本を読んで考え事をする時間は、私にとって至福のひと時です。

著者の知識や考えを、時代や場所を超えて、誰でも知ることができるという本のすばらしさ。そして、図書館は、そういう本をたくさん所蔵して利用しやすいように分類・配置し、本の専門家である司書さんまでいる、すばらしいところです。図書館に行くと、誰もが、必要な書籍を、すぐに無料で入手できる、こんなシステムの恩恵を受けることができるなんて、とても恵まれた環境にいるんだなあと思います。

また、目的の本を探す途中で、寄り道するように別の本に目が行き、思いがけず面白い本を見つけることもしばしばあります。これも図書館のすばらしさの一つでしょう。書店ですと、ちょっと気になっただけで購入するのは予算面や収納スペースの面で躊躇することも多いですが、そういうことを全く気にせずに気軽に借りることができるのも、図書館のよいところです。

ただし、気分転換のための気楽な読書の場合を除いて、本を読むときに私が留意していることがあります。それは、「読書は他人にもものを考えてもらうことである。」「ほとんどまる一日を多読に費やす勤勉な人間はしだいに自分でものを考える力を失って行く。」ということです。これは、ショウペンハウエルの『読書について』（岩波文庫 青 632-2）の一部ですが、確か、大学受験用の国語の問題集でこの本を知り、その後随分経ってから購入しました。本に書いてあることを無条件に知識として吸収するのではなく、著者と対話しながら自分の思索を深めていく。こういう読み方を目指しながら、皆さん、図書館をおおいに活用しましょう。

電子ブックのご案内

和医大図書館では、参考図書や洋書を中心に電子ブックを導入しています。電子ブックは、学内 LAN に接続されたどの端末からでも利用可能です。OPAC（蔵書検索）で「電子ブック」と入力すれば簡単に検索が行えます。また、図書館三葛館 HP の「電子ブック」欄の提供元一覧からアクセスすることも可能です。ぜひ、ご利用ください。

- ★ Maruzen eBook Library : 丸善株式会社による日本語電子ブック配信サイト
 - ★ Books@Ovid : Ovid 社が提供する医学系電子ブック配信サイト
 - ★ Wiley Online Library : Wiley 社が提供する電子ブック・電子ジャーナル配信サイト
- 三葛館電子ブック案内サイト：<http://opac.wakayama-med.ac.jp/mikazura/Ebook/index.htm>

図書館について

医学部 教養・医学教育大講座（化学） 教授 茂 里 康

人生で一番目によく図書館を利用したのは、私が20代半ばで初めて社会人になり、勤務した製薬会社で研究開発を行った頃です。昼食を一階の社員食堂でいただき、そのまま二階にある図書館に行って、新着の国際誌をパラパラとめくるのが毎日の日課になっていました。総合大学の中央図書館に行かないと読めないような雑誌が、ほぼ完璧に揃えられていたのに感心しました。そういう日々を入社以来数か月繰り返していたところ、図書館のお姉さま方に次第に懇意にいただき、よくお茶を頂き、徐々に会社に慣れていった事が懐かしく思い出されます。また当時インターネットも無い時代に、国際電話回線を繋いで、カレントコンテンツ（現在トムソン・ロイター社）や Ringdoc（薬学情報サービス）等の、欧米の文献・情報検索サービスにアクセスして、瞬時に過去の論文や医学・薬学情報を検索するシステムに驚愕した事を鮮明に覚えています。

人生で二番目によく図書館を利用したのは、私が小学生高学年の頃です。一歳年上の兄がいる関係で、両親は高校入試を二年連続経験する事を恐れ、その時代ではまだ少なかった私立中学入試を受けなさいと、ある日命令されました。進学塾も数少ない時代に、週末には電車に乗って大阪市内の塾に行き、平日の放課後はできるだけ小学校の図書館に籠って、国語の勉強のために多数の本を読破するという毎日でした。そのかいもあって、一度読んだ本が本当に中学入試の問題で出てきた時は非常に驚き、無事中学入試に合格する事ができました。その時の本のタイトルは今も覚えています、「銀色ラッコのなみだ」という岡野薫子さんが執筆した本です。

人生で三番目によく図書館を利用しているのは、今・現在です。図書館三葛館を訪れると、専門図書以外にも、各種医学・薬学・看護関係の書籍が充実していますので、私にとっては非常にありがたい存在です。学生ホール・食堂で勉強されている学生さんもたくさん拝見しますが、静寂と集中、知識を広げるためにも是非とも、図書館三葛館をご利用されることをお勧めします。

本から学ぶ

保健看護学部 助教 寒 川 友 起 子

私は昔から本を読むのが苦手であり、あまり図書館に通った記憶はなかった。短大を卒業し看護師として就職してからも、看護技術の本や就職した部署に関連する参考書程度は図書館に行き、読むことはあったがそのくらいであった。しかし、看護師として働いて6年目のころ、病棟でのある出来事から「患者のニードっていったいなんなのだろう」という疑問を持ったことがあった。そして、短大のころに学

んだ記憶のある看護の本を探して読みなおした。学生時代は、講義やレポートのために看護の本を読んでいた。しかし、その時は現場でぶつかった問題を解決し、答えを見つけたいという思いで内容を読みすすめ、本から自分の考えの乏しさを反省させられた記憶がある。それ以来、仕事のことや人間関係など、自分で悩んであれこれ考えて答えを見つけるだけでなく、なるべく自分が求めている本を読み、そこから自分を振り返ることで楽しさを感じるようになった。

看護師は、職業柄、多様な経験を積んだ人、異なる年齢の人々と出会う。そのため、自分の世界で物事を考え、行動しているだけでは、対象とする人々が求めることを理解し、看護を提供することは難しい。10年以上看護師として働く中で、自分の世界を広げること、また広げられなくても多様な世界を理解しようとする心を持つことの大切さを学んだ。その方法の一つに本がある。最近、図書館に行くことも以前より多くなり、自分の必要な本以外にも、新書コーナーや自分の興味のある本棚を見ながら本を手にとることもある。本を読んでいると、その人の思いを自分のことに置き換えてみたり、自分の周囲にいる人のことを想像して考えたり、さまざまな興味関心から自分自身新たな一歩を踏み出せるように感じる。本の種類は無限である。そのため、自分の人生を豊かにしていくためにも、本を読む時間を作り、著者の世界を楽しみながら自分自身も楽しめる生活を過ごしていきたい。

私が感銘を受けた女性による著作物のご紹介

保健看護学部 講師 藤田和佳子

小学校の時だったと思うのですが、初めて近所の市立図書館に足を運んだ時、その膨大な蔵書量の中でワクワク感が抑えられなかった記憶があります。この本の中に、一体どれだけの世界が広がっているのだろうと想像すると、果てしない海原のように感じました。私は本を読むことが大好きで、読書感想文のコンクールに応募したり、新聞の読者投稿欄に投稿したりするのが好きでした。コーヒーと本と自然、この3つが揃っていたら、私は大体どこでも幸せに過ごせる人間です。

私は助産師なので、自分の中に常に「女性の味方でありたい」という思いがあります（男性は、「人により」味方でありたい程度）。ですので、女性によって書かれた著作の中で感銘を受けた幾つかの本をご紹介します。まず、ジャーナリスト千葉敦子氏です。全ての著作が好きですが、お薦めは『寄りかかっては生きられない』です。彼女の本を読むと、女性として生きる闘志が湧きます。千葉氏は乳がん若くして亡くなりますが、彼女の著作から真の「自立」とは何かを学びました。桐島洋子氏の『渚と漣と舵』も何度も読み返す一冊です。3人の子どもを抱えてアメリカで生きていく波乱万丈な実話は、破天荒ですが女性のバイタリティーを感じます。和歌山出身の有吉佐和子氏も好きです。あまり有名ではありませんが、非白人に対する人種差別を描いた『非色』は読み応えがありました。三浦綾子氏も好きでした。中学生の時、『塩狩峠』のラストシーンで涙が止まらず、自宅のトイレに籠りトイレットペー

パーをガラガラ回しながら読んだ記憶があります。北海道の鉄道の運転手であった主人公が、事故で暴走する列車の線路に身を投げて乗客を救った実話を書いた本です。海外の著者では、イマキュレー・イリバギザ氏の『生かされて (Left to tell)』が感動しました。ルワンダ虐殺の体験を書いたものです。想像を絶する凄まじい環境を信仰心で生き抜き、後に国連職員に昇り詰めるルワンダ人女性の手記です。

私はかなりのフェミニストかもしれません。助産師なので、力強く生きる女性を心から応援したいし、女性たちの力になりたいのです。

本と私

医学部 教養・医学教育大講座 (生物学) 講師 森田 強

最近、再び本を読み始めた。学生の頃は、布団の中で必ず本を読んでから眠りについたものだ。話に入り込むと文字を読んでいるという意識が薄れ、文章が映像や音声として頭の中で再生されているような錯覚に陥る瞬間がある。こうなると時間はあっという間に過ぎてしまい、気がつけばもう朝ということも度々だった。ところが、結婚をして子供ができる読書をする時間はめっきり減ってしまった。自分一人の世界に浸っているよりも、家族と過ごす時間の方が大切になったからだ。図書館に行っても、自分のための本を探すことはまずない。子供が好きな絵本や電車の本ばかりである。そんな中、去年の4月に和歌山県立医科大学に着任し、再び自分の本を読む時間を得た。JR 阪和線という周りから干渉されない45分の空間だ。初めての長距離通勤に不安を覚えていたが、本が一冊あれば時間などあっという間に過ぎてしまう。むしろ、乗り越してしまう方が心配だ。こうして、電車が今の私にとって最良の図書室となっている。

学生の頃の私にとって、もう1つの読書スペースは大学の図書館だった。特に試験期間中の勉強部屋として大変重宝した。身の回りに誘惑があると、つついそちらに気を取られて勉強が捗らない。なので、図書館の自習スペースに置かれた机が専ら私の学習机だった。というか、一人暮らしの自室に勉強机は無かった。友達の中には、勉強会と称してファミレスやファストフード店に集う輩もいたが、私は図書館独特の静寂の中で勉強をするほうを好んだ。分厚く重い参考書を持ち歩く必要もないし、その当時はまだまだ発展途上であったが、インターネットを使用することもできた。また、衝立で区切られた巾1メートルほどの空間が、狭い方が集中できる私の性分に合っていたのだ。机には先人達の書いた落書きが所狭しと残されていたが、勉強の合間にそれらを読むのが丁度良い息抜きにもなっていた。ある冬の日、昼食後から図書館に籠もり一通り時を過ごして外に出てみると、晴天だった空からは大粒の牡丹雪が降り地面には20センチ近い雪が積もっていた。図書館の持つ独特な空気の中では外の世界と流れる時間が違ってしまうと強烈に認識したことを今でもよく覚えている。

さて、今の学生はどの程度図書館を活用しているのだろうか。確かに、図書館で本を探さなくともスマートフォン1つあれば、大概の疑問に対する答えをほんの数分で手に入れることができる。しかし、言い古さ

れたことではあるが、やはり図書館という空間や紙媒体の本には、手軽でデジタルな情報に代え難い様々な魅力があることをもっと知ってもらいたいと思う。かく言う私も、三葛の図書館にはまだ数度しか訪れたことがないのだが、今後は読書空間を阪和線から図書館へと広げることで、読書ライフをより充実したものにしたいと目論んでいる。

図書館での過ごし方

助産学専攻科 助教 吉川 さ わ 子

スマホやiPadが外出時の必需品となる少し前のころには、バッグには必ず文庫本がおさまっていた。今は車通勤となったことや近い文字が見えづらくなったことを理由に、バッグの中に本がおさまる機会がめっきりと減ってしまった。寂しい限りである。

図書館での思い出はいくつもあるが、真っ先に思いつくのは図書館で過ごしている見知らぬ人たちがなぜ図書館にいるのかと、勝手な想像を膨らませたのが楽しかったな、ということ。ボランティアとしてブータンへ行く前に、市立図書館の学習室へ週2回ほど通い、英語の勉強をした。朝から日が陰るころまでと時間を決めて、机に向かった。しかし、集中力はそう長くは続かないもので、気が付くと隣に座っている人や、こちら向きに向こうの机に座っている人などを盗み見しては「この人は一体何をしている人なのだろう」「どんな家族構成なのかな」「平日の朝から図書館で勉強している人って一体何をしている人だろう」「何の勉強をしているのかな」と想像を巡らせるのも楽しみの一つだった。何のために図書館へ来ているのか、彼らの本当の目的はわからないけれど、私にとって図書館は非日常の世界であり、やる気スイッチが入る場所であった。周りの人たちが、ひしひしかりかりとペンを走らせている姿や音に影響され、私も頭をフル回転させることができた。お昼には持参のおかかしょうゆおにぎり、チョコレートとコーヒーを味わい、それはいつも同じメニューだけどまっとく飽きることはなかった。そして午後からも眠気に打ち勝つべく、ブータンへ思いを馳せながら、問題集に取り組んだ。

初めて出会った人々なのに、図書館の学習室という場を共有しているだけで親近感を覚えるのは私だけだろうか。横に座っている人も、向かいに座っている人も何らかの目的に向かって今、図書館にいる。何のためにかはわからないが、何かに向かうために、同じ時をここで過ごしている。そんなふう想像するだけで自分一人でないことを感じ、再び机に向かうことができた。



本嫌いの私が図書館を好きになった理由

保健看護学部 助教 米 島 望

学生時代のことを思い返すと、私はあまり本を読む方ではなかったし、特に図書館が好きという訳ではなかった。理由は、単に字がたくさんある本を見ると読む気をなくしていたからだ。

大学生のときは、課題が多かったため調べ物が多くなり、自ずと三葛館に足が向かっていた。特に記憶に残っているのは、演習のためのレポート作成だ。いつも教科書を中心にまとめて演習に臨んでいたが、ある手順の根拠が教科書だけでは分からず、自分の中で引っかかっていた。気になった私は、珍しく自分から図書館で調べ物をした。そこで厚さが 5cm 程度ある分厚い本がたまたま目にとまった。開いてみると、予想通り文字ばかりではあったが、読んでいくととても分かりやすく根拠が書かれていた。その本のおかげで私の引っかかりは解消され、それからその本は私のお気に入りの一冊になった。今思えば、これをきっかけに、本を読んだり、調べ物をしたりすることが少し好きになったのだと思う。

その後も実習やゼミの研究のための調べ物、就職後部署でよく行われる検査や治療のための調べ物など、ことあるごとに図書館に通っていた。来館する人が静かに何かに打ち込んでいるその空間は、学生時代からやる気が長続きしない私にとっては「私も頑張らないと」と思わせてくれる、とても心地よい空間だった。

教員となって戻ってきた今、より多くの本に触れるようになった。三葛館で調べ物をすることも多いのだが、私が学生だった頃よりも幅広い書籍が揃っているように思う。特に最近の看護技術関連の書籍は、言葉では分かりにくいところが写真や動画などで見られるよう工夫されており、格段に分かりやすくなっている。時代に合わせて書籍も進化しているなど感じる。

今はインターネットで検索すれば、なんでも答えが出てくる、本当に情報にあふれている時代だと思う。だからこそ、何が正しい情報なのか、考える機会が少なくなっているように思う。書籍についてもどんどん電子化が進んでいるが、今でも私は紙の本が好きだ。紙の本を開いて、自分でページをめくって調べていくことで、自分の頭も整理されるように思う。調べ物をしていて、以前読んだことのある本をもう一度開いてみると、新たな発見があることも多い。こういうところが本の良いところだと思う。

以前は本があまり好きでなかった私だが、三葛館で様々な本に触れる中で、徐々に本が好きになっていった。振り返ってみると本当にささいな理由である。是非皆さんも居心地の良い三葛館で、自分のお気に入りの本を探してほしい。

平成 30 年度 展示図書テーマ一覧

第 87 回「あなたの「はじめて」応援します」

第 91 回「平成を本で振り返る」

第 88 回「じっくり自分と向き合ってみる。」

第 89 回「今までに 1 度も借りられたことがない本」

第 90 回「本と旅する。」

4 年間の思い出

平成 30 年度ベストリーダー賞第 1 位 卒業生 西 岡 美 保

こんにちは。この度は、ベストリーダー賞をいただきありがとうございます。私は、この 4 年間でたくさんのお本に出会うことができました。1 年生の頃は、英語の本をたくさん借りていたように思います。私自身、あまり英語は得意ではありませんが、これからの時代の流れとしてグローバル化がどんどん進んでいることから、少しでも英語を話せるようになりたいと思って読んでいました。2 年生・3 年生になるとどんどん医学・看護学の専門的な学習が増え、分からないことも多くなり、分からないことがあればその都度本を借りて調べるようにしていました。臨床実習が始まると、教科書には載っていない病態もあり、自分の知識不足を痛感しながらも友達と励ましあいながら勉強していたことが懐かしく思い出されます。実習が終了すると、国家試験の勉強が本格的に始まり、問題集を借りたり友達と一緒に勉強したりと、振り返ると図書館にはたくさんお世話になりました。

図書館にはたくさんのお本が揃えられています。そして、看護雑誌などもあり、とても充実した施設であると思います。いつも図書館の方々には温かく迎えていただきました。在校生の皆さんもぜひ図書館で本を借りたり、勉強したりと利用してみてください。きっと得られるものがあると思います。

平成 30 年度保健看護学部卒業生の表彰を行いました！

平成 31 年 3 月 15 日に在学中貸出冊数上位者の表彰を行いました。
卒業生 1 人あたりの平均貸出冊数は 248 冊で、第 1 位の方の貸出冊数は 575 冊でした。
前年度を上回る平均冊数となり、より多くの本が皆様のお役に立てたことを嬉しく思います。
また、卒業後も卒業生として図書館三葛館をご利用いただけます。
利用者カードは破棄せずに保管ください。
今後も三葛館を大いにご活用いただければと思います。



MIKAZURA NOW!

平成 29 年度 利用統計

年間開館日	280 日
入館者数	28,411 人
(1 日平均)	101 人
貸出人数	7,368 人
図書貸出冊数	26,687 冊
視聴覚資料貸出件数	162 点
相互利用依頼件数	357 件
相互利用受付件数	1,036 件
学外利用者数	393 人

三葛館の蔵書 2017

蔵書冊数	56,877 冊
うち洋書	8,948 冊
所蔵雑誌種数	1,006 種
うち外国語	148 種
年間受入図書冊数	1,063 冊
うち洋書	126 冊
年間受入雑誌種数	465 種
うち外国語	110 種
	(2018/3/31 現在)

